

第4学年「式と計算」における評価について

1 本校の指導体制

- (1) 少人数について… 3～6年生に少人数制
- (2) 4年生の少人数（編成）… 等質2クラス編成で実施している。
（メリット）… 個に関わる時間が増える いろいろな児童のアイデアが出る 児童が集中できる
（デメリット）… より深い学習ができない 指導環境のマンネリ化 児童の希望に応えられない

2 評価システムについて

- (1) 評価規準について
昨年度より研究に取り組んできた。点数化ということでジレンマがあったが、評定のための評価にならないよう全学年で取り組んだ。香算研の評価規準をもとに作成した。
- (2) 評価基準（判断基準）について
より具体的な判断基準になるよう配慮した。担任及び少人数担当とこまめに打ち合わせを行い、学年レベルで足並みをそろえて、児童の習熟に還元できるよう工夫した。
- (3) 評価シートについて
普通の授業での様子や、ワークシートなどの表現物を簡単に評価し、データ蓄積できるようにした児童の名前とともに、評価規準、判断基準が明記されている。またエクセルを活用し、点数合計も入力と同時に出力するよう作成している。

3 評価の実際（第4学年：単元「式と計算」による）

- (1) 少人数担当及び学年団の先生と打ち合わせ
評価対象時間、教具、児童への発問・助言の仕方、配慮を要する児童へのかかわり方などを共通理解
- (2) 授業中での評価
児童の発言、児童の操作など、その時間の児童の様子を補助簿に記入する。
- (3) 授業後の評価
ワークシートなどをチェックする。
- (4) 少人数担当及び学年団の先生と打ち合わせ
児童のワークシートを見ながら、判断基準の細かいラインを決定する。次時への共通理解をする。
- (5) データ入力
点数化（一評価6点満点）した結果を入力する。
- (6) 県版テストの実施
各テストを観点及び単元ごとに分けて、点数を入力する。
- (7) 調整（重み付け）
各観点の合計から、バランスを見る。また評定の重み付けをチェックする。

4 評価と指導の一体化

- (1) 自己振り返りファイルの活用
児童の振り返りから、つまづきをチェックし、個別指導する。児童と教師のコミュニケーション
- (2) 家庭学習の在り方
単元計画を見ながら、次時の単元の系統性を考えた宿題を出す。
- (3) 保護者との連携（情報提供）
学年便りを通して、教材の指導観や習熟できていない学習内容の紹介、学習定着などを行う。

5 今後の課題

(1) 個人内評価について

現在のシステムでは、児童が単元においてどのように伸びたのか、また何が原因でつまづいているのかが、評価にあらわれてこない。所見としてしか評価できないのが現状である。

(2) 時間内の評価について

この評価システムは、時間後の評価（児童のワークシートを見ながら）に偏っている。そのため、授業内の児童の気づきや、一般化するような発言などが評価しにくい。そこで、発表や操作などを記録できるよう、座席表などを活用し、点数化していきたい。

6 成果

教師の評定のための評価 < 児童の学習に還元するもの

保護者への説明責任 < 指導と評価の一体化

教師自身が授業に責任をもち、実践を反省することができる。次時へ生かすことができる。

児童への指導ポイントが明確になる（学年間の教師の足並みがそろう）

単元終了後に学習状況が把握でき、児童への助言の目安ができる（ここをこうがんばればできるよ）

学年団での打ち合わせが確保でき、いろいろ相談することができる。

テスト重視に歯止め